

# 発達障害およびその疑いのある 学生に対する大学教職員の意識調査

—The Attitude Survey of University Faculty and Staff toward  
Students with or Suspected Developmental Disorder—

小池有紀  
若井雅之

- <目次> 1. 背景と目的  
2. 方法  
3. 結果  
4. 考察

## 1. 背景と目的

大学において発達障害のある学生の在籍数が増加していることは、日々学生と関わる教職員が実感しているところではないだろうか。実際、独立行政法人日本学生支援機構（2012a）が全国の大学・短期大学・高等専門学校の全1,206校（学生3,235,575人）を対象に行った調査によると、発達障害の診断書のある学生は1,453人、発達障害の診断書はないが発達障害があることが推察され教育上の配慮を行なっている学生は2,310人在籍していると報告され、2008年度から始められた同実態調査からここ4年の間で増加の一途をたどっていることが分かる。

2005年には発達障害者支援法が施行され、第8条2項には「大学及び高等専門学校は、発達障害者の障害の状態に応じ、適切な教育上の配慮をするものとする」と規定されている。また同年、文部科学省から各大学宛に出された通知においても、発達障害のある学生に対して適切な配慮と具体的な支援を行うよう求められている。

そうした現状と法律を踏まえ、大学によっては既に入学、学習、学生生活、就職、そして災害時各々の場面で想定される困難に沿った支援メニューを設けたり（独立行政法人日本学生支援機構、2012b）、障害学生支援室や発達障害専門のコーディネーターを置くことで体制を整えたりしている。

本学が全学的に支援に乗り出したのは2010年からである。2010年5月に「発達障害の基礎知識に関するパンフレット」を学生相談室が作成、全教職員へ基礎知識の普及を目的に配布を行った。続いて2011年4月からは新入生を対象に、入学時に University Personality Inventory（全国大学保健管理協会が1966年に作成）を用いた「新入生アンケート」を実施することで、発達障害のある学生も含めた特別な配慮が必要と思われる学生に対して早期発見・早期支援を試み始めた。また同年5月には「FD・SD研修」において初めて発達障害をテーマに取り上げた。

しかしこれらのことは導入に過ぎない。発達障害と一口にいってもその特性や困難は千差万別であり、個々の学生が「その時に抱える問題によってその都度対応するしかない」（山本，2003）難しさがある。だからこそ、今後も大学全体において発達障害の理解を深める取り組みが継続的に必要となる。

そこで本研究では、大学の教員と職員それぞれに、（1）発達障害のある学生に見られやすい特徴を示す学生と関わる際に感じる「困難の度合い（困難度）」、（2）発達障害のある学生に見られやすい特徴を示す学生と関わる際に学生相談室のカウンセラーに期待するサポート、（3）発達障害に限らず気になる学生に対してこれまで実際どのような指導や配慮をしてきたのか、を尋ねる質問紙調査を行う。そしてその結果をもとに、本学における発達障害およびその疑いのある学生への支援のあり方について検討することを目的とする。

## 2. 方法

### （1） 調査対象

調査対象は本学の教員（専任）73名，職員（専任・嘱託）81名であった。そのうち教員40名（回収率54.8%），職員43名（回収率53.1%）分の質問紙を回収した。そこから回答に不備のあるものを除いた教員33名，職員39名のデータを最終的な分析対象とした。

### （2） 調査時期とその手続き

2011年7月5日から7月8日にかけて教員には教員用の，職員には職員用の質問紙を配布し，各自に記入と学生相談室直通のポストへの投函を求め，回収した（締切り2011年7月29日）。

### (3) 質問紙の内容

#### ①フェイスシート

性別、年齢、職歴、学部（教員用のみ）、現在のゼミなどの少人数クラスの担当の有無（教員用のみ）、過去のゼミなどの少人数クラスの担当の有無（教員用のみ）、現在の学生との関わりの頻度（職員用のみ）、過去の学生との関わりの頻度（職員用のみ）、FD・SD研修『発達障害に関する基礎知識と具体的な関わり方』への参加の有無、発達障害の診断のある学生との関わりの頻度、発達障害の疑いのある学生との関わりの頻度、自由記述。

#### ②発達障害のある学生に見られやすい特徴を示す学生と関わる際に感じる困難度を問う項目

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2007）、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・独立行政法人日本学生支援機構（2009）、淵田（2010）の研究を参考に作成した。教員用と職員用それぞれ30項目設けた（教員用と職員用とでは項目1, 11, 13, 16, 19, 28でそれぞれの業務内容に合わせた異なる項目を設けた。それ以外の項目は同一とした）。

#### ③発達障害のある学生に見られやすい特徴を示す学生と関わる際に学生相談室のカウンセラーに期待するサポートを問う項目

臨床心理士である著者らがこれまでの学生相談活動で実際に行ってきたこと、及び今後の実践として考えられることとして検討し、作成した12項目（その内6項目は教職員自身に対するサポート、他の6項目は学生本人に対するサポートについて問うた）。教員用と職員用は同一の内容とした。

#### ④発達障害に限らず気になる学生に対してこれまで実際にどのような指導や配慮をしてきたのかを問う項目

淵田（2010）の研究を参考に作成した。教員用14項目（その内9項目は学生本人への指導・配慮、他の5項目は関係者との連携について問うた）、職員用11項目（その内6項目は学生本人への指導・配慮、他の5項目は関係者との連携について問うた）。教員用の質問項目から、主に教員独自の業務となるであろう

3項目（教員用の項目7, 8, 9）を削ったものを職員用とした。

### 3. 結果

#### （1）分析対象者の属性

フェイスシートより得られた本研究の分析対象者の属性を教員と職員毎に示す（Table 1, 2）。

教員・職員ともに、6割以上が発達障害の疑いのある学生と関わったことがあり、さらに関わりの有無を問わなければ9割以上は少なくとも見かけたことがあると回答していたことが分かった。

#### （2）発達障害のある学生に見られやすい特徴を示す学生と関わる際に感じる困難度

発達障害のある学生に見られやすい特徴を示す学生と関わる際に感じる困難度を問う項目（教員用30項目、職員用30項目）について、「1：全く困難を感じない」、「2：あまり困難を感じない」、「3：やや困難を感じる」、「4：とても困難を感じる」の4件法で回答を求めた。それぞれの選択肢に回答した人数とその割合を、以下に示す（Table 3. 教員、Table 4. 職員）。

山下（2012）を参考に、「3：やや困難を感じる」と「4：とても困難を感じる」と回答した人数を合わせた群を「困難を感じる群」とすると、教員でその割合が高くなった上位5項目は「6. 他者とトラブルを起こすことが多い学生（75.8%）」、「5. じっとしていることが苦手な学生（72.8%）」、「7. 他者の嫌がることを言うてしまうことが多い学生（69.7%）」、「20. ちょっとしたことで感情的になることが多い学生（69.7%）」、「4. 文字を読むことが苦手な学生（66.7%）」であった。また、職員では「20. ちょっとしたことで感情的になることが多い学生（92.3%）」、「6. 他者とトラブルを起こすことが多い学生（89.7%）」、「7. 他者の嫌がることを言うてしまう

Table 1. 教員の属性

(N=33)

性別	男性	女性	未回答
年齢	28 (84.8)	4 (12.1)	1 (3.0)
職歴	40歳未満 7 (21.2)	40歳代 9 (27.3)	50歳代 5 (15.2)
学部	3年未満 1 (3.0)	3年以上10年未満 8 (24.2)	10年以上20年未満 9 (27.3)
SD・FD研修の参加の有無	商学部 18 (54.5)	法学部 15 (45.5)	60歳代 10 (30.3)
現在のゼミなどの少数クラスの担当の有無	参加した 15 (45.5)	参加しなかった 18 (54.5)	20年以上 15 (45.5)
過去のゼミなどの少数クラスの担当の有無	担当している 31 (93.9)	担当していない 2 (6.1)	未回答 2 (6.1)
発達障害の診断のある学生との関わり	担当したことがある 32 (97.0)	担当したことはない 1 (3.0)	
発達障害の疑いのある学生との関わり	関わったことがある 13 (39.4)	見たことはあるが関わったことがない 9 (27.3)	見たことも関わったこともない 10 (30.3)
未回答			1 (3.0)
発達障害の疑いのある学生との関わり	関わったことがある 21 (63.6)	見たことはあるが関わったことがない 9 (27.3)	見たことも関わったこともない 3 (9.1)

人 (%)

Table 2. 職員の属性

性別	男性		女性	
	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)
年齢				
40歳未満	23 (59.0)		16 (41.0)	
40歳代			40 (100.0)	
50歳代			8 (20.5)	60歳以上
60歳以上			2 (5.1)	
職歴				
3年未満	19 (48.7)		10 (25.6)	10年以上20年未満
3年以上10年未満			13 (33.3)	20年以上
10年以上20年未満			5 (12.8)	
20年以上			15 (38.5)	
SD・FD研修の参加の有無				
参加した	13 (33.3)		26 (66.7)	
参加しなかった				
よく関わる				
時々関わる				
ほとんど関わらない				
全く関わらない				
現在の学生との関わりの頻度				
よく関わっていた	21 (53.8)		10 (25.6)	全く関わらない
時々関わっていた			7 (17.9)	
ほとんど関わって いなかった				
全く関わって いなかった				
過去の学生との関わりの頻度				
よく関わっていた	23 (59.0)		10 (25.6)	全く関わって いなかった
時々関わっていた			3 (7.7)	未回答
ほとんど関わって いなかった				
全く関わって いなかった				
発達障害の診断のある学生との関わり				
関わったことがある	9 (23.1)		14 (35.9)	未回答
関わったことがない				
発達障害の疑いのある学生との関わり				
関わったことがある	27 (69.2)		9 (23.1)	未回答
関わったことがない			3 (7.7)	
関わったことがない				

Table 3. 発達障害のある学生に見られやすい特徴を示す学生と関わる際に感じる困難度（教員）

(N=33)

質問項目	全く困難を感じない		あまり困難を感じない		やや困難を感じる		とても困難を感じる	
	人	%	人	%	人	%	人	%
1. 自分の意見を交えてレポートを書くことが苦手な学生	4	12.1	15	45.5	11	33.3	3	9.1
2. 休講連絡や試験日程など必要な情報を入手することが苦手な学生	2	6.1	15	45.5	13	39.4	3	9.1
3. 協調性を発揮することが苦手な学生	1	3.0	11	33.3	18	54.5	3	9.1
4. 文字を読むことが苦手な学生	3	9.1	8	24.2	13	39.4	9	27.3
5. じっとしていることが苦手な学生	2	6.1	7	21.2	15	45.5	9	27.3
6. 他者とトラブルを起すことが多い学生	3	9.1	5	15.2	10	30.3	15	45.5
7. 他者の嫌がることを言ってしまうことが多い学生	2	6.1	8	24.2	13	39.4	10	30.3
8. 誤字脱字が多い学生	7	21.2	20	60.6	5	15.2	1	3.0
9. 物事の優先順位をつけることが苦手な学生	5	15.2	18	54.5	9	27.3	1	3.0
10. 指示を聞き逃すことが多い学生	3	9.1	16	48.5	9	27.3	5	15.2
11. 授業内容をノートにまとめることが苦手な学生	4	12.1	20	60.6	6	18.2	3	9.1
12. 同時に複数のことをこなすことが苦手な学生	5	15.2	17	51.5	7	21.2	4	12.1
13. ノートをとるのに遅れることが多い学生	4	12.1	19	57.6	9	27.3	1	3.0
14. 順番を待つことが苦手な学生	4	12.1	14	42.4	13	39.4	2	6.1
15. 同じ発言を繰り返すことが多い学生	1	3.0	19	57.6	9	27.3	4	12.1
16. 集中して授業を受けることが苦手な学生	2	6.1	10	30.3	18	54.5	3	9.1
17. 急な予定変更に対応することが苦手な学生	3	9.1	15	45.5	14	42.4	1	3.0
18. 独り事の多い学生	4	12.1	11	33.3	12	36.4	6	18.2
19. 授業の開始時間を守れないことが多い学生	2	6.1	14	42.4	14	42.4	3	9.1
20. ちょっとしたことでも感情的になることが多い学生	2	6.1	8	24.2	13	39.4	10	30.3
21. 出し抜けに発言・質問をすることが多い学生	4	12.1	16	48.5	8	24.2	5	15.2
22. 話すことが苦手な学生	6	18.2	15	45.5	11	33.3	1	3.0
23. 忘れ物が多い学生	2	6.1	22	66.7	9	27.3	0	0.0
24. たとえ話を理解することが苦手な学生	3	9.1	20	60.6	10	30.3	0	0.0
25. 提出物の期日を守れないことが多い学生	4	12.1	12	36.4	14	42.4	3	9.1
26. 整理整頓が苦手な学生	5	15.2	20	60.6	7	21.2	1	3.0
27. こだわりが強く、他の考え方に理解や共感を示すのが苦手な学生	1	3.0	12	36.4	14	42.4	6	18.2
28. 論文執筆など計画的に進めなければならないような作業が苦手な学生	2	6.1	16	48.5	12	36.4	3	9.1
29. 他者が読みやすい字を書くことが苦手な学生	2	6.1	20	60.6	9	27.3	2	6.1
30. 周りから孤立していることが多い学生	4	12.1	14	42.2	10	30.3	5	15.2



Table 4. 発達障害を持つ学生に見られやすい特徴を示す学生と関わる際に感じる困難度（職員）

(N=39)

質問項目	全く困難を感じない		あまり困難を感じない		やや困難を感じる		とても困難を感じる	
	人	%	人	%	人	%	人	%
1. 履歴書など自分の意見を交えるような書類を書くことが苦手な学生	7	17.9	14	35.9	16	41.0	2	5.1
2. 休講連絡や試験日程など必要な情報を入手することが苦手な学生	5	12.8	13	33.3	15	38.5	6	15.4
3. 協調性を発揮することが苦手な学生	3	7.7	11	28.2	19	48.7	6	15.4
4. 文字を読むことが苦手な学生	7	17.9	6	15.4	17	43.6	9	23.1
5. じっとしていることが苦手な学生	3	7.7	8	20.5	17	43.6	11	28.2
6. 他者とトラブルを起すことが多い学生	1	2.6	3	7.7	13	33.3	22	56.4
7. 他者の嫌がることを言ってしまうことが多い学生	1	2.6	5	12.8	21	53.8	12	30.8
8. 誤字脱字が多い学生	6	15.4	24	61.5	9	23.1	0	0.0
9. 物事の優先順位をつけることが苦手な学生	6	15.4	15	38.5	18	46.2	0	0.0
10. 指示を聞き逃すことが多い学生	1	2.6	13	33.3	22	56.4	3	7.7
11. 必要事項をメモにまとめることが苦手な学生	5	12.8	20	51.3	13	33.3	1	2.6
12. 同時に複数のことをこなすことが苦手な学生	6	15.4	23	59.0	9	23.1	1	2.6
13. メモをとるのに遅れることが多い学生	8	20.5	25	64.1	6	15.4	0	0.0
14. 順番を待つことが苦手な学生	2	5.1	11	28.2	22	56.4	4	10.3
15. 同じ発言を繰り返すことが多い学生	2	5.1	15	38.5	17	43.6	5	12.8
16. 集中して話を聞くことが苦手な学生	1	2.6	14	35.6	20	51.3	4	10.3
17. 急な予定変更に対応することが苦手な学生	3	7.7	18	46.2	14	35.9	4	10.3
18. 独り事の多い学生	2	5.1	18	46.2	15	38.5	4	10.3
19. 約束の時間を守れないことが多い学生	2	5.1	4	10.3	26	66.7	7	17.9
20. ちょっとしたことでも感情的になることが多い学生	1	2.6	2	5.1	15	38.5	21	53.8
21. 出し抜けに発言・質問をすることが多い学生	2	5.1	10	25.6	22	56.4	5	12.8
22. 話すことが苦手な学生	7	17.9	19	48.7	12	30.8	1	2.6
23. 忘れ物が多い学生	3	7.7	24	61.5	10	25.6	2	5.1
24. たとえ話を理解することが苦手な学生	3	7.7	19	48.7	14	35.9	3	7.7
25. 提出物の期日を守れないことが多い学生	3	7.7	9	23.1	21	53.8	6	15.4
26. 整理整頓が苦手な学生	7	17.9	20	51.3	9	23.1	3	7.7
27. こだわりが強く、他の考え方に理解や共感を示すのが苦手な学生	2	5.1	5	12.8	20	51.3	12	30.8
28. 履歴登録など計画的に進めなければならないような作業が苦手な学生	0	0.0	13	33.3	22	56.4	4	10.3
29. 他者が読みやすい字を書くことが苦手な学生	6	15.4	14	35.9	17	43.6	2	5.1
30. 周りから孤立していることが多い学生	9	23.1	16	41.0	12	30.8	2	5.1

ことが多い学生 (84.6%)」, 「19. 約束の時間を守れないことが多い学生 (84.6%)」, 「27. こだわりが強く, 他の考え方に理解や共感を示すのが苦手な学生 (82.1%)」であった。

教員・職員で共通して上位5項目に入ったのは「6. 他者とトラブルを起こすことが多い学生」, 「7. 他者の嫌がることを言うことが多い学生」, 「20. ちょっとしたことでも感情的になることが多い学生」の3項目であり, 他者とのトラブルにつながりやすい内容の項目で高い傾向があった。

### (3) 発達障害のある学生に見られやすい特徴を示す学生と関わる際に学生相談室のカウンセラーに期待するサポート

発達障害のある学生に見られやすい特徴を示す学生と関わる際に学生相談室のカウンセラーに期待するサポートを問う12項目について, 「1:期待しない」, 「2:あまり期待しない」, 「3:やや期待する」, 「4:期待する」の4件法で回答を求めた。それぞれの選択肢に回答した人数とその割合を, 以下に示す (Table 5. 教員, Table 6. 職員)。

教員・職員ともに「4:期待する」と回答した人数の割合が1番高かったのは, 自身に対するサポートでは「1. 学生対応の相談 (教員51.5%, 職員64.1%)」, 学生本人に対するサポートでは「7. 個別カウンセリング (教員63.6%, 職員76.9%)」であった。

### (4) 発達障害に限らず気になる学生に対して, これまで実際にどのような指導や配慮をしてきたのか

発達障害に限らず気になる学生に対して, これまで実際にどのような指導や配慮をしてきたのかを問う項目 (教員用14項目, 職員用11項目) について, 「1:全くしたことがない」, 「2:ほとんどしたことがない」, 「3:時々したことがある」, 「4:よくしたことがある」の4件法で回答を求めた。それぞれの選択肢に回答した人数とその割合を, 以下に示す (Table 7. 教員, Table 8. 職員)。

Table 5. 発達障害のある学生に見られる特徴を示す学生と関わる際に学生相談室のカウンセラーに期待するサポート（教員）

(N=33)

質問事項		期待しない		あまり期待しない		やや期待する		期待する	
		人	%	人	%	人	%	人	%
サポート 対する 教員自身に	1. 学生対応の相談	0	0.0	6	18.2	10	30.3	17	51.5
	2. 学生と関わる際のカウンセラーの同席	3	9.1	9	27.3	11	33.3	10	30.3
	3. 学外であなたが利用できる医療・相談機関の紹介	6	18.2	9	27.3	12	36.4	6	18.2
	4. 発達障害に関する資料の貸出	3	9.1	5	15.2	16	48.5	9	27.3
	5. 発達障害に関する学内研修の開催	1	3.0	7	21.2	16	48.5	9	27.3
	6. 複数の教職員で支援を行う際のコーディネーター役	2	6.1	5	15.2	14	42.4	12	36.4
サポート 対する 学生本人に	7. 個別カウンセリング	1	3.0	2	6.1	9	27.3	21	63.6
	8. 学内の他の教職員の紹介	1	3.0	7	21.2	11	33.3	14	42.4
	9. 学外で学生が利用できる医療・相談機関の紹介	3	9.1	3	9.1	11	33.3	16	48.5
	10. 発達障害に関する資料の貸出	3	9.1	4	12.1	17	51.5	9	27.3
	11. グループワーク（コミュニケーションの練習、居場所の提供等）	1	3.0	3	9.1	14	42.4	15	45.5
	12. 発達障害についての理解を深める個別授業	2	6.1	5	15.2	14	42.4	12	36.4

「3：時々したことがある」と「4：よくしたことがある」と回答した人数を合わせた群を「気になる学生に対して指導や配慮をしたことがある群」とすると、教員・職員で共通してその割合が高くなった上位3項目は「1. 個別相談（進路、生活、人間関係等）（教員90.9%、職員79.5%）」、「2. 日常における積極的な声掛け（教員93.9%、職員76.9%）」、「3. 一般常識やマナーに関する注意・指導（教員81.8%、職員71.7%）」であった。また、教員独自の項目では「7. 学習に関する個別支援」でも高い割合となった（81.8%）。

一方、「気になる学生に対して指導や配慮をしたことがある群」の割合が

Table 6. 発達障害のある学生に見られる特徴を示す学生と関わる際に学生相談室のカウンセラーに期待するサポート（職員）

(N=39)

質問事項		期待しない		あまり期待しない		やや期待する		期待する	
		人	%	人	%	人	%	人	%
サポート 対する 職員自身に	1. 学生対応の相談	0	0.0	4	10.3	10	25.6	25	64.1
	2. 学生と関わる際のカウンセラーの同席	1	2.6	10	25.6	18	46.2	10	25.6
	3. 学外であなたが利用できる医療・相談機関の紹介	7	17.9	14	35.9	12	30.8	6	15.4
	4. 発達障害に関する資料の貸出	1	2.6	6	15.4	17	43.6	15	38.5
	5. 発達障害に関する学内研修の開催	0	0.0	7	17.9	11	28.2	21	53.8
	6. 複数の教職員で支援を行う際のコーディネーター役	2	5.1	5	12.8	13	33.3	19	48.7
サポート 対する 学生本人に	7. 個別カウンセリング	1	2.6	1	2.6	7	17.9	30	76.9
	8. 学内の他の教職員の紹介	2	5.1	10	25.6	13	33.3	14	35.9
	9. 学外で学生が利用できる医療・相談機関の紹介	0	0.0	7	17.9	11	28.2	21	53.8
	10. 発達障害に関する資料の貸出	2	5.1	11	28.2	14	35.9	12	30.8
	11. グループワーク（コミュニケーションの練習、居場所の提供等）	0	0.0	1	2.6	16	41.0	22	56.4
	12. 発達障害についての理解を深める個別授業	3	7.7	7	17.9	18	46.2	11	28.2

低かった下位2項目は教員・職員ともに「6. 学外で学生が利用できる医療・相談機関の紹介（教員3.0%，職員5.2%）」、「教員用14. /職員用11. 学外の医療・相談機関との連携（教員6.1%，職員0.0%）」であった。

#### 4. 考察

ここでは結果で示されたことをもとに、本学における発達障害およびその疑いのある学生への支援のあり方について考察する。

全学的に支援に取り組んでから日の浅い本学にとって、第一に目指す段階

Table 7. 発達障害に限らず気になる学生に対して、これまで実際にどのような指導や配慮をしてきたのか（教員）

(N=33)

質問項目	全くしたことがない		ほとんどしたことがない		時々したことがある		よくしたことがある		
	人	%	人	%	人	%	人	%	
学生本人への 指導・配慮	1. 個別相談（進路、生活、人間関係等）	1	3.0	2	6.1	20	60.6	10	30.3
	2. 日常における積極的な声掛け	0	0.0	2	6.1	20	60.6	11	33.3
	3. 一般常識やマナーに関する注意・指導	1	3.0	5	15.2	18	54.5	9	27.3
	4. 学生相談室の紹介	3	9.1	10	30.3	17	51.5	3	9.1
	5. 学内の他の教職員の紹介	7	21.2	14	42.4	11	33.3	1	3.0
	6. 学外で学生が利用できる医療・相談機関の紹介	20	60.6	12	36.4	1	3.0	0	0.0
	7. 学習に関する個別支援	1	3.0	5	15.2	20	60.6	7	21.2
	8. 学習時の、本人の特性に応じた配慮（捕捉資料の提供、ワープロや録音機の使用許可等）	4	12.1	12	36.4	13	39.4	4	12.1
	9. 試験時の、本人の特性に応じた配慮（試験方法の変更、評価の配慮）	6	18.2	13	39.4	7	21.2	7	21.2
関係者 との連携	10. 学生の家族との連絡・提携	11	33.3	12	36.4	8	24.2	2	6.1
	11. 周囲の学生との協力	4	12.1	13	39.4	14	42.4	2	6.1
	12. 学生相談室との連携	7	21.2	11	33.3	13	39.4	2	6.1
	13. 学内の他の教職員との連携	7	21.2	11	33.3	14	42.4	1	3.0
	14. 学外の医療・相談機関との連携	19	57.6	12	36.4	2	6.1	0	0.0

は、支援の必要性や特性に応じた支援内容の理解が教職員にある程度浸透する段階（佐藤・徳永，2006）であると考えられる。そのことから「教職員による発達障害の特性理解と適切な対応の必要性」について考察する。その上で、中島（2003）、屋宮（2009）、萩原（2010）らが発達障害学生支援に必要と述べている「連携による支援」について考察する。

Table 8. 発達障害に限らず気になる学生に対して、これまで実際にどのような指導や配慮をしてきたのか（職員）

(N=39)

質問項目		全くしたこと がない		ほとんどした ことがない		時々したこと がある		よくしたこと がある	
		人	%	人	%	人	%	人	%
指導・ 配慮 への 学生 本人	1. 個別相談（進路、生活、人間関係等）	4	10.3	4	10.3	18	46.2	13	33.3
	2. 日常における積極的な声掛け	1	2.6	8	20.5	21	53.8	9	23.1
	3. 一般常識やマナーに関する注意・指導	2	5.1	9	23.1	21	53.8	7	17.9
	4. 学生相談室の紹介	8	20.5	14	35.9	15	38.5	2	5.1
	5. 学内の他の教職員の紹介	11	28.2	10	25.6	16	41.0	2	5.1
	6. 学外で学生が利用できる医療・相談機関の紹介	24	61.5	13	33.3	1	2.6	1	2.6
との 連携 関係 者	7. 学生の家族との連絡・提携	13	33.3	10	25.6	13	33.3	3	7.7
	8. 周囲の学生との協力	16	41.0	11	28.2	9	23.1	3	7.7
	9. 学生相談室との連携	10	25.6	10	25.6	18	46.2	1	2.6
	10. 学内の他の教職員との連携	6	15.4	7	17.9	22	56.4	4	10.3
	11. 学外の医療・相談機関との連携	24	61.5	15	38.5	0	0.0	0	0.0

### （１） 教職員による発達障害の特性理解と適切な対応の必要性～個々人ができること～

結果（２）から、教員・職員共通して、他者とのトラブルにつながりやすい特徴を示す学生と関わる際には高い困難を感じる、ということが示唆された。そこには、教職員が発達障害のある学生への対応を知らないために適切に関われず困っていたり、学生本人だけでなく周囲の学生もトラブルに巻き込まれる可能性を心配していたりすることが考えられる。実際本学の教職員が、トラブルを起こしやすい学生への対応に関する相談のために学生相談室を訪れることは少なくない。

発達障害のある学生が他者とトラブルになる背景には、発達障害の様々な

特性が挙げられる。例として、本学での事例を個人が特定されない範囲で紹介する。発達障害の一つであるアスペルガー障害が疑われる男子学生 Z 君は、仲良くしていた部活の Y さんをメールでデートに誘った。Y さんは「お友達で」と返信した。その後も誘い続ける Z 君に困った Y さんは、学生相談室へ相談に訪れた。カウンセラーと相談した末に Y さんは「好きな人がいるので、Z 君と出掛けることはできません。部活の時はお話ししましょう」と具体的に返事をしたところ、Z 君からの誘いは止まった。この事例から、Z 君には他人の視点に立って物事を見ることに困難があったり、字義通りに受け取って暗黙の了解が読み取れなかったりするなどの特性があることが窺える。また浅川・市橋 (2007) は、発達障害の一つである注意欠陥多動性障害 (AD/HD) の特徴を多くもつ学生が、情動の抑制や制御を容易にすることができない特性を持っており、それが良好な交友関係の形成を阻害している可能性があることを示唆している。

結果 (4) では、これまでほとんどの教職員が、発達障害に限らず気になる学生に対し、個別指導や声掛け、一般常識やマナーの指導を、学生対応として行ってきたことが分かった。しかし先にも述べた通り、様々な特性を持つ発達障害のある学生に対しては、普段通りの対応では伝わりにくい場合があることを認識しておく必要がある。周囲の理解の無さや適切ではない対応は、彼らの自己評価を下げ、対人場面での被害的、攻撃的な態度を招き、二次的にトラブルを引き起こすことにもなりうるのである (小田切, 2007)。例えば、学生相談室では、個人面接の中で本人の特性を踏まえ、自己理解を深める関わりやソーシャルスキルトレーニング等を取り入れて、大学生生活に適應できるよう支援している。そうした対応はトラブル予防となり、且つトラブルが発生したとしても、事後のフォローや振り返りを行うことで、再発防止と学生の成長につなげられると考える。それぞれの教職員の役割や時間的な制約によって対応は異なるにせよ、障害やその状態、場面等に応じた特性の理解や適切な関わりを取ることができれば、学生を追い込まず、トラブルへの発展を防ぐことができると考える。

また結果（3）からは、教員・職員ともに学生相談室に求めるサポートとして、学生対応の相談や情報提供を高く期待することが分かった。そのことから今後の課題として、発達障害の特性や想定されるトラブル時の対応ポイントをまとめた教職員向けガイドブックの作成、FD・SD研修の継続的な開催、コンサルテーション活用の促進などが考えられる。

## （2）連携による支援～教員・職員・学生相談室のカウンセラーの役割～

結果（4）では、これまで実際に行われた学生への指導や配慮において、学外機関の活用と連携については、教員・職員共通してほとんど行われていなかったことが分かった。その理由としては、学外機関の活用と連携に際しては、専門的な情報や知識が必要とされるためだと思われる。一方、結果（3）の Table 5, 6を見ると、教職員がカウンセラーに対して、学生への学外機関の紹介を高く期待していることが分かる（教員「4：期待する」48.5%、「3：やや期待する」33.3%/職員「4：期待する」53.8%、「3：やや期待する」28.2%）。このことから、学生相談室は「学外とのつなぎ」を役割の一つとして、率先して担うことが求められているといえる。例えば、学生が利用する学外の医療機関と学生相談室が、本人の了承を得た上で情報共有をすることもその一つである。これにより、カウンセラーの学生理解はより進められ、学生との信頼関係の構築を早めて、より良い支援を実現することが可能となる（毛利, 2009）。また在学中から、発達障害専門の学外機関へ学生をつなげることにより、就労も含めた卒業後のフォローにも配慮することとなる（岩田, 2003）。

学生相談室がこうした「学外とのつなぎ」としての役割を果たすためにも、同時に「学内でのつながり」が重要となってくる。教職員が発達障害およびその疑いのある学生と関わっている際に、必要に応じて学生相談室へ情報提供や対応相談に訪れてもらえれば、学外機関の有効な活用を、カウンセラーから学生もしくは教職員へ提案する機会が得られよう。



実際これまでの学生相談室との連携について、結果（４）の Table 7, 8 を見てみると、教員では「４：よくしたことがある」と回答した人は6.1%、「３：時々したことがある」と回答した人は39.4%、職員では「４：よくしたことがある」と回答した人は2.6%、「３：時々したことがある」と回答した人は46.2%であった。連携を数多く取れば良いとは一概に言えないが、「３：時々したことがある」教職員へ今後さらに働きかけることにより、学内連携の機会を増やすことが、より密な情報交換や共有を可能にし、互いにとって学生理解の助けにすることができると思われる。

また結果（３）の Table 5, 6を見ると、教職員がカウンセラーに対して、複数の教職員で支援を行う際のコーディネーター役も、高く期待していることが分かる（教員「４：期待する」36.4%、「３：やや期待する」42.4%/職員「４：期待する」48.7%、「３：やや期待する」33.3%）。このことから、今後の課題としては、学内および学外の関係者が複数手を携え支援を行う際にも、カウンセラーがコーディネーターとして「学外とのつなぎ」と「学内でのつなぎ」を結ぶ役割が求められているといえよう。

#### 〔謝辞〕

本論文の質問紙に、日々の業務や学生対応の中ご回答下さった本学教職員の皆様に心から感謝申し上げます。また、多くの指摘を下された本学学生相談室の小池直カウンセラーにも深謝いたします。

#### 〔文献〕

- 浅川潔司・市橋真奈美 2007 AD / HD 的行動傾向が大学生の大学適応感に及ぼす影響。兵庫教育大学研究紀要, 30, 19-23.
- 岩田淳子 2003 高機能広汎性発達障害の大学生に対する相談について。学生相談研究, 23, 243-252.
- 屋宮公子 2009 学生相談における発達障害学生への心理教育的アプローチ—高機能広汎性発達障害学生への長期支援プロセスの検討—。学生相談研究, 30, 23-34.
- 小田切紀子 2007 学生相談におけるアスペルガー症候群の学生への援助のあり方。学生相談研究, 28, 51-61.

- 佐藤克敏・徳永豊 2006 高等教育機関における発達障害のある学生に対する支援の現状. 特殊教育学研究, 44 (3), 157-163.
- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 2007 発達障害のある学生支援ケースブック=支援の実際とポイント=. ジアース教育新社.
- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・独立行政法人日本学生支援機構 2009 高等教育機関における発達障害のある学生に対する支援に関する研究. 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所.
- 独立行政法人日本学生支援機構 2012a 平成23年度(2011年度)大学, 短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書.
- 独立行政法人日本学生支援機構 2012b 教職員のための障害学生修学支援ガイド(平成23年度改訂版).
- 中島暢美 2003 高機能広汎性発達障害の学生に対する学内支援活動—アスペルガー障害の学生の一事例より—. 学生相談研究, 24, 129-137.
- 萩原豪人 2010 特別支援教育を受けてきたアスペルガー症候群の学生の支援体制—入学時の環境調整及び支援ネットワークの構築—. 学生相談研究, 30, 167-178.
- 淵田吉男研究代表 2010 発達障害学生の全学的支援に向けたシステムの構築. 平成22年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト(P&P)研究活動報告書.
- 毛利真紀 2009 広汎性発達障害を持つ女子学生との心理面接過程—障害と自己の特性理解についての考察—. 学生相談研究, 30, 1-11.
- 山下親子 2012 コミュニケーションの難しい学生に関するアンケート調査. 淵田吉男研究代表 平成22-23年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト(P&P)研究活動報告書, 7-28.
- 山本真由美 2003 対人関係や学習上の問題を抱える学生における発達障害の可能性とその対応. 学生相談研究, 24 (1), 21-30.